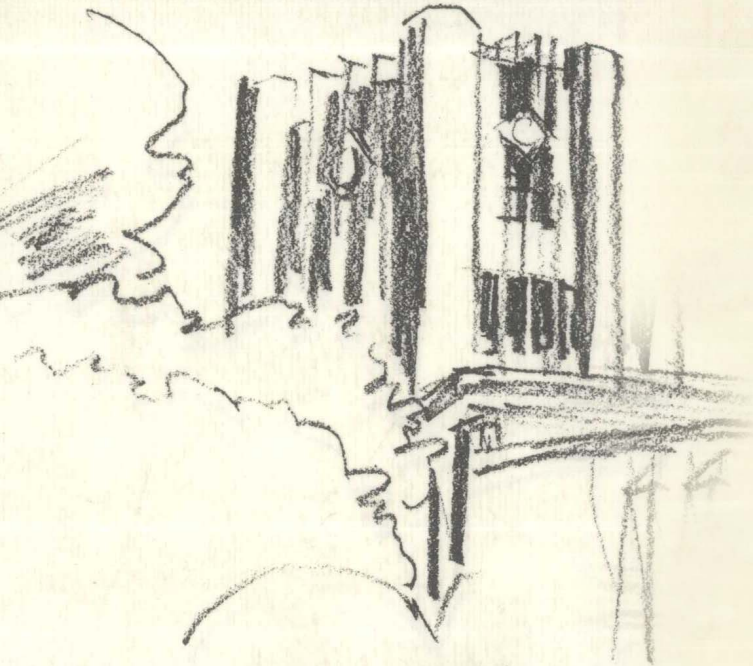

大学出版の日々

石井和夫

東京大学出版会

日本の出版文化

石井和夫

東京大学出版会

江苏工业学院图书馆藏

著者略歴
1927年　名古屋市に生まれる
1948年　東京大学文学部入学
1949年　東京大学消費生活協同組合出版部学生委員
1951年　東京大学出版部編集主任
1952年　東京大学文学部卒業
1962年　財団法人東京大学出版会理事（編集担当）
1975年　同専務理事
1985年　大学出版部協会幹事長
1988年　財団法人東京大学出版会定年退職

現住所
東京都杉並区本天沼3丁目20番3号

大学出版の日々

1988年7月8日　初　版

〔検印廃止〕

著　者　石井（いしい）　和夫（かずお）©

発行所　財団法人　東京大学出版会

代表者　菅野　卓雄

113 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内
電話（811）8814・振替東京6-59964

印刷所　株式会社理想社印刷所
製本所　牧製本印刷株式会社

ISBN 4-13-003046-9

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

大学出版の日々

レフェリー制度 3／文部省刊行助成 4／三位一体 5／校正 6／書評 7／本の生命 8／正字の印刷 9／複写 10／書籍番号 11／学会センター 12／執筆要領 13／刊行のスピード 14／本との出会い 15／年頭の願い 16／紙不足 17／特別協力店 18／東大と東大出版会 19／赤字の赤字 20／留学生の学位論文 21／南原繁先生 22／定価 23／装幀 24／本屋にない本 25／古島敏雄著作集 26／住木諭介先生 27／望みなきにあらず 28／昭和五十年 29／マンネリズム 30／大学の教科書 31／学術書複製版 32／東京大学公開講座 33／大学の紀要 34／渡辺一夫先生 35／『戦後改革』完結 36／『宗教学辞典』の書評 37／UPバイオロジー 38／割愛の効用 39／東大生の読書 40／図書文化賞 41／二十五周年 42／戦後日本の教育改革 43／中原和郎先生 44／研究機関刊行物 45／真贋 46／福笑い 47／大学の第三勢力 48／英文出版 49／化学の原典 50／コピー規制 51／学術書の衰退 52／社会学四十年 53／南原繁資料室 54／東大百年 55／宇野弘蔵先生 56／戦後社会調査のインデックス 57／医科研教養セ

ミナー 58／助成出版物の負担 59／評議員会 60／南原繁書簡 61／学術出版の問直し 62／一九七七年を送る 63／読初めに思うこと 64／海を越えての審査 65／試験の季節 66／大学教材 67／ＪＩＢＰ報告集 68／本を読もう 69／グーテンベルクが殺される 70／五百年と百年と 71／地震にとりくむ 72／古書店に似合う本 73／文献の調べ方、探し方 74／〝活字離れ〟の意味 75／外山正一日記 76／話の広場 77／古典の酒は甘い 78／大学の講義 79／〝子ども〟の本 80／フミの日 81／引用の倫理 82／中国の日本図書展 83／出版社名 84／出版の助成 85／売れない本 86／図書交流の役割 87／学問に未来がほしい 88／量と質 89／大学とは…… 90／出版の饗宴 91／海の向うの声価 92／大内兵衛先生 93／文化的所産の公正な利用 94／鳥井隆二さん 95／国際歴史学会議日本国内委員会 96／史料館叢書 97／木戸幸一日記 98／国際的共同出版 99／二冊目の本 100／大学と大学出版部——『ＵＰ』一〇〇号をふりかえって——101／良書の累積によって受ける利益 103／印刷の技術革新 104／身にしみる話 105／文化財としての漢字母型 106／出版文化の輸出 107／開発途上国の翻訳権 108／東洋文化研究所 109／テキスト離れ 110／読者カード 111／補助金とは 112／学生が本を読まぬとお嘆きの先生方に 113／試験と読書 114／卒業証書への疑問 115／アメリカ学 116／無酸紙と本の永続性 117／高山寺本 118／工具書 119／八月

十五日 120／『現代の農業経営』のアラビア語訳 121／学術出版の危機 122／ミナトガワマン 123／清寺真先生 124／読書のすすめ 125／古典と現代 126／仁井田陞先生の戦前と戦後 127／虚構と歴史科学 128／生涯学習―國崎裕先生のこと 129／日本学士院賞 130／帰ってきた学生たち 131／文化の翻訳 132／知識をすすめよ、広く遠く 133／新装版『日本政治思想史研究』 134／新しい風、『現代法哲学』 135／勇気ある企画 136／一九八四年 137／東京大学百年史 138／スズキのカタログ 139／賞を機縁に 140／各務財団優秀著書賞 141／障害児の実存と教育 142／子どものための学校 143／ジャーディン＝マセソン商会 144／国連・人類コミュニティ 145／福祉国家とは 146／材料テクノロジー 147／大河内一男先生 148／講座日本歴史 149／二十世紀とは何であったか 150／本を美しくする 151／ケンブリッジUPの再建 152／大学の講義(1) 153／大学の講義(2) 154／東京大学の四季 155／講座美学 156／ハガキ注文 157／国際学会プロシーディングス 158／認知科学の出発 159／日韓大学出版部セミナー 160／中国の大学出版社 161／道標を立てる 162／日本研究図書出版促進計画 163／大学図書館との提携 164／東大の内と外 165／子どもと本 166／関一日記 167／ヒヨコからの脱皮 168／科学英文技法 169／有澤廣巳文庫 170／大学生の読書生活 171／東大フォーラム 172／学術出版振興基金 173／世界史の扉を開く 174／文化遺産と著作権 175／人口の波

176／〝異文化〟としての東洋　177／坂本太郎先生　178／重厚長大本　179／大学生協の頑張り　180／愚かしい戦争　181／新刊の点数　182／町の図書館　183／いま本造りを考える　184／類書を尺度に　185／三度目の戊辰　186／科学図書の在り方　187／創立記念日のこと　188／今井登志喜先生と都市学会　189／有澤廣巳先生　190／大学出版部の国際連帯　191／相性　192

内輪のはなし

大学出版の初心と課題……197
学術出版はどこへいく……206
大学出版部の本と読者……219
あとがき……231

装画　金城龍男
装幀　鈴木　堯

大学出版の日々

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

レフェリー制度

すぐれた研究成果でありながら商業採算ベースにのらないため、陽の目をみないという学術書の嘆きをいくらかでも軽くできればという思いから、「東京大学出版会刊行助成」を始めて、かれこれ十五年たつ。ちょうど新制大学院の稔りの秋ということもあり、かなりの数の推薦をいただくようになった。そうなると限られた基金ですることだから、どうしてもいくつかにしぼらなければならない。甲乙つけがたい力作、しかも多分野にわたる候補のうちからどれを選ぶかということはまさに至難に近い。

そこでアメリカの大学出版部に学んで採ったのがレフェリー制度であった。幸い、当会の理事は十の学部、十四の研究所から選任された教授達で構成されている。その理事諸先生に、候補論文の専門分野に近い人と隣接領域の研究者をあげていただき、二人以上の方に審査をお願いすることとした。

千枚もの原稿をいきなり持ちこまれ、審査して下さいと言われた方は、迷惑千万なことだったろう。しかし、一度も断られたことはない。それどころか、克明にメリット、デメリットをあげ、構成や文章についての忠告、はては誤字の訂正までして下さるのである。そのたびに、我々は学問の道を歩む人びとの共感に打たれる。

（一九七二年十一月）

文部省刊行助成

正確には科学研究費補助金・成果刊行費という。*①学術定期刊行物、②学術図書、③二次刊行物等の三種類に分かれ、我々にかかわりのあるのは主に②の学術図書である。

公募要領によると、「個人または学会等が、個人または共同による研究の成果を発表するために刊行する図書であって、学術的価値が高いが、市販性に乏しいため国庫補助がなくては刊行の困難なもの」とある。「市販性に乏しい」とは発行一千部以下をいい、「出版者の企画によるもの」「市販しないもの」は対象にならない。補助金は組版、製版、印刷、用紙、製本代など直接製作費に限られ、特別な場合以外、編集経費（校閲、整理、割付、校正費等）は認められず、もちろん印税・原稿料はない。申請時（十二月初旬）現在で原稿は完全にでき上っており、予算が確定する五～六月頃に採択の可否が通知され、年度末までに刊行する義務を負う。

これは、あくまでも研究者自身が、自らの手で印刷所や製本屋に交渉し、紙を買付け、流通機構にのせることを前提とした制度である。長年専門研究に打ちこみ、この補助金を利用する以外に公刊の方便をもたないような「学者」にこんなことが自分でできるわけがあるだろうか。かくして毎年今頃になると、我々は自らの企画を放棄し、文部省の「学術振興」の成果をあげるために、日夜申請書づくりに追われることとなる。

（一九七二年十二月）

* この名称は昭和六十一年度に研究成果公開促進費とあらためられた。

三位一体

東京大学出版会が南原繁先生の発起により、全東大教授陣のバックアップで発足してから二十二年たつ。成立の経緯から会長には総長が就任することにきまった。初代・南原先生、二代・矢内原忠雄先生になる。敗戦の廃墟のなかで大学の復興をになった南原先生が「大学人の、大学人による研究発表の場」という大きな構想を立てられたのに対し、矢内原先生は社会科学研究所創立の所長や初の教養学部長を歴任、もっぱら新しい大学の建設に当られたせいであろうか、大学出版部の任務をより明快かつ具体的に与えられた。

①優れた学術成果、②整備された知識体系、③教養と啓蒙、この三つの柱による書物の刊行がそれである。第一は研究の場としての大学、第二は教育の場としてのそれ、第三は大学のエクステンションとしての啓蒙（公開講座を始められたのも矢内原先生であった）に対応する。

出版のジャンルで分ければ、学術書・教科書・教養書ということになる。象牙の塔といった閉ざされた大学から、国民全体の開かれた大学へという大きな転換期に当って矢内原先生が示されたこの柱は、当り前のことといってもいいだろう。われわれはこれを三位一体とよんで、大学の先生方にそれぞれの著書をつくって下さることを期待した。しかし、それがどんなに難しいものかだんだん判ってきた。先生がなぜ口をすっぱくして、大学の責務をわれわれにまで説かれたか、今になって思いあたることが多い。

（一九七三年一月）

校　正

「校正は著者と読者と出版社の信頼関係をつなぐひとつの鍵だ。」東大出版会の初代理事長・有澤廣巳先生は私ども編集担当者の心得として、校正の重さを折にふれては説かれた。それは著作者としての先生の実感をこめた訓えであった。いつか、花森安治さんが「校正の神様」という随筆のなかで著者の書きぐせを熟知した練達の校正者のことを書いておられたが、文章の生命は漢字・かなの使い方ひとつにかかっている、それを校正者がさかしらに直してはいけないという戒めでもあった。私どもも「校正とは字と字を引き合わせるもの、読んでは駄目だ」と先輩に教えられたものである。一字の脱落、誤植が文意をそこない、著者の意図を読者にあやまりつたえてしまう。まことに「コーセイ　オソルベシ」、とても「赤鉛筆一本で優雅な内職」とはいかない。

ところが、最近のように、国語・国字の改革や、手直しが年中行事のように行なわれると、執筆者の神経が表記の細部にまで行きわたらないといった事態も生じてき、往々にして「かなづかいはそっちで統一して下さい」などといわれる。文選や植字といった印刷過程のコンピュータ化とともに、表記の機械的統一が要請されている今日、ここに大きな陥し穴が生じているように思われてならない。原稿の忠実なトレースという校正者の原則に、裁量の余地がしのびこむからである。

（一九七三年二月）

書評

ある大新聞の学芸部長に書評をたのみにいってこう言われた。「おたくの本は紙面が硬くなるんで取上げにくいんだな」と。なるほどそういうものかと思ってから、もう十数年たつ。この頃では学術書用に小さな囲みの紹介がおこなわれるようになった。

昨年の暮、東洋文化研究所の山崎利男先生がイギリスの新聞を整理していたらタイムズに東大出版会の本のブックレビューが出ていたとわざわざ切抜きを送って下さった。永井道雄氏の *Higher Education in Japan* の書評だった。タイムズの書評の権威についてはよく聞かされていたが、身近な本がとりあげられてみると、スペースといい、内容といい、懇切丁寧で、これはたいしたものだと感心した。欧米では日本の出版流通機構とちがって返品自由というわけではないため、書店もこうした書評に目を配って品をそろえると聞いている。われながら現金な話だが、この書評で何冊海を渡ることだろうかと秘かに皮算用をしたのも事実である。

わが国の大新聞とタイムズとでは、発行部数も読者層も違うから、読書欄の編集方針に差があって当然、学術的ないし専門的な図書は専門雑誌にゆずるというのも一理であろう。だが、最近のマスコミではよく、学問研究の意義を問いなおすということが言われる。その意味からいうなら、本格的な研究書に即して大新聞も地道な検討批判を加えてほしいものだと思う。（一九七三年三月）

本の生命

「十年かけて書いた本は十年はもつものだよ。」東大出版会が生まれたころ農業綜合研究所の所長をしておられた東畑精一先生は、よくそう言われて私どもを励まされた。愛書家として知られる先生の言葉にはたいへん重みがあった。実際、先生がおすすめ下さった大内力先生の『日本農業の財政学』（一九五〇年）や金沢夏樹先生の『稲作の経済構造』（一九五四年）など、いずれも当時の鋭い問題意識に立つ重厚な労作で、いまでも日本農業研究の基礎文献として読者を絶やさない。こうして長い生命をもつ本の刊行は私どもの金科玉条となってきた。

ところがである。十年たち二十年たちして、そうした書物もいつか数百点をかぞえ、千点をこえるにいたった。それぞれが何年間かにわたって読者を待つのであるから、当然、在庫豊富となる。そこで問題となるのはその置き場所である。乾湿にデリケートな本のこと、その管理に細心の注意がいり、どこでもいいというわけにはいかない。今日のような土地騰貴の折からでは、倉庫を建てるといってもなまなかな資金でできるわけはない。そのうえ、倉庫はもとより、在庫品も資産に計上されて課税の対象となるのである。税制調査会長・東畑精一先生はそこまでお見通しであったかどうか。

とはいえ、われわれは百年の知己をまつ一冊一冊の書物を際物出版のように裁断・廃棄する気にはなれない。本の命を守ることが、本を造り出す以上に難しい時代になってきた。

（一九七三年四月）

正字の印刷

このたび玉村竹二先生の『五山文学新集』に学士院賞が贈られた。半生をこれに打ちこんでこられた先生の御労苦の一端が酬いられたわけで、先生にとってはもちろん、六巻、六年間にわたる刊行のお手伝いをさせていただいた私どもにとっても、大きな喜びである。そして、それにつけても、この膨大かつ困難な組版にあたられた金沢のヨシダ印刷には感謝の言葉もない。

かねて、坂本太郎先生はじめ史料編纂所の歴代所長の諸先生に、大日本史料や大日本古文書の印刷難打開のため、何とか正字母型（それも十二ポイントや五号活字）の保存と文選工の確保を講ずる道はないものかとご相談に伺ったものである。しかし、名案はなかった。いったい、いま東京に、正字いわゆる旧漢字の組版ができる印刷所が何軒あるというのだろう。まず、あの戦争の空襲で多くの印刷所が焼け、活字の母型が失われた。ついで、戦後の国語改革で当用漢字が定められ、略字体が採用されて以来、正字の使用範囲は極端にせばまり、新漢字による教育は正字を拾える文選工養成の基礎を破壊した。部首の変更は活字の配列を二重にし、印刷所に設備投資倍加の重荷を課した。

こうしたことから、正字を主体とする国語・国文学、国史、中国古典、東洋史の学術書は、金沢へ、長野へ、岐阜・奈良・京都、はては韓国・台湾へと、母型と文選工のいる印刷所をもとめてさまようことになった。しかしそれとても、印刷所の経営がいつまでそれを許すのか、その保証は皆無なのである。

（一九七三年五月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com